#### 令和2年8月22日 第3号

## かわら版 育種の波動

全国新品種育成者の会発行

次期国会に先送りとなった種苗法改正を実現しようとする会の取組みを紹介します。

## 動画を作成して<mark>育種の実情を</mark> 知ってもらう活動に取り組む

岡山市でぶどうを育種する林慎悟さんは、法案反対の声が出始めた5月4日に、SNSのNoteに自身の思いをアップしました。予想を上回る反応があり、改正に対して様々な意見を持つ人と対談形式のYou Tubeの作成を始めました。編集からアップは奥さんが協力して行い、夫婦二人で取り組んでいます。



山田正彦氏(左)と対談する林さん

完成した4作品の対談者は、農林水産省知的財産 課の藤田裕一種苗室長、改正反対者の山田正彦元 農林水産大臣、古来野菜の販売を行う高橋一也氏 、日本の種子(たね)を守る会会長の印鑰(いんやく) 智哉氏等の4人です。賛成者、反対者を問わずに対 談相手を選んでいるのは、自身の意見を押し付ける のでなく、多くの意見を紹介して育種の実情等への 理解を深めてもらうためです。

林さんは、「この活動を通して、法改正や育成者の 権利 が もっと認められる世の中になることを願って やみません」と、その思いを語っています。

### 会員の種苗法改正への思いを掲載

#### 雑誌「農業経営者」

月刊誌「農業経営者」が、種苗法の改正の動きにあ わせて、育成者の声を紹介することとなりました。この 度8月号が発刊され、金澤美浩さん、林慎悟さん、小 原誠さんの3人の声が掲載されました。「育種によっ て品種という金の卵を増やさないと消費者が損をす る」(金澤)、「良い品種ができれば生産者も利益を生 み出せるのに、育種にかけた費用と労力を回収する 仕組みがない」(林)、「果樹は県の試験場でも、許諾料収入は1%にもなっていない。登録後も登録維持費もかかるので、途中で権利を放棄してしまう品種も多い」(小原氏)等と、切実な思いが述べられています。

次の9月号にも、会員の声が掲載される予定です。

#### 新入会者紹介

○小関 正司(47歳) 岐阜県加茂郡坂祝町 登録品種:エボルブルス4品種、ヒペリクム3品種○渡部泰蔵(85歳) 秋田県横手市

登録出願中品種:サギソウ2品種

#### 訃報

金澤大樹氏(会員、金澤相談役の長男) 享年40歳 6月28日不慮の事故により逝去され ました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 硬肉ブドウ新品種の栽培者団体を 設立し、ブランド生産に取り組む

昨年度、ブドウの育種と普及の功績が認められ、 育種賞を受賞された山梨県笛吹市の原田員男(かずお)さんの取組みを紹介します。

原田さんはお父さんのブドウ栽培を継ぎ、昭和47年からは育種にも取り組んできました。ブドウは交配時期と開花結実時期が重なるため、早朝や夕方、時には夜間にヘッドライトをつけて交配作業などに取り組んでこられました。これまでに「ルーベル マスカット」、「マスカット ビオレー」、「アリサ」、「ソニア スウィート」、「ゴールド フィンガー」の5品種を登録し、「プリアモーレ」、「アウローラ21」、「秩父ルビー」の商標登録を行ってきました。

世界でも少なかった鮮紅色のマスカットぶどうを作ろうと育成した「ルーベル マスカット」は、赤い色調で食味の良さが特徴の品種です。

「秩父ルビー」は、平成16年にこの品種を食味した 元秩父市長が地域の期間品種として産地化に取り 組み、一般公募して選ばれたこの名称を商標登録 し、現在は35名によって5haで栽培されています。

「アリサ」と「アウローラ21」は、それまでわが国にはなかった硬肉種無しブドウの走りとなった品種です。自分の畑でも作りたいと要望するJVC(ブドウの栽培、新品種の試作、育種者の組織)会員もいたことから、栽培が困難なこの2品種を栽培するにあたり、情熱と技量を持った者を集め、原田さんが代表となって良質な硬肉ブドウのブランド生産を目的とした「アリサアウローラ アソシエーション」(AAA)を設立しました。「AAA」は、栽培技術の高い者を会員にするため加入者は生産者から選抜し、新たな加入者も会員の推薦で入会してもらっていて、毎年行う栽培された果実の検討会等を通して、会員の栽培技術の向上を

図っています。生産したブドウは、全て同一の仲卸業者に出荷しています。そして、会員以外の生産物が流通しないように、会員の生産物には出荷箱と房に商標を貼ったシールを付けて出荷しています。

今後の目標としては、天然無核の早熟品種の開発 に力を注いでいきたいと思っています。

#### 投稿 イペー育種のこぼれ話(小林泰生)

青空に映える鮮やかな花色が美しいイペー(Ipe) は南アメリカが故郷である。耳慣れない名前かもしれないが、"ブラジルで愛される花"や"ウッドデッキに用いるイペー材"と聞けば、思い当たる人も多い。

イペーはノウゼンカズラ科 (Biginoniaceae) タベブイア属 (Tabebuia) に含まれる顕花植物の一つである。庭先で見かけるノウゼンカズラのような「つる性」ではなく、樹高が5~6m以上の「亜高木~高木」に大きく成長しなければ開花しないという「幼若性」があること、多くの種類が耐寒性に欠けること、花が安定して通年咲かないことなどが泣き所である。「このような植物にも、早く咲いたり、寒さに強い遺伝子があるはずだ」と話してくれたのは、アルゼンチンに6年住んだ鹿児島大学の名誉教授である。

私は、福岡県の園芸研究所を退職後、2010年からイペーの交雑を開始し、今年で雑種第6代となる。

その結果、紅紫系イペーでは播種後6ヶ月の幼苗 (茎長25㎝)で開花すること、低節位で多分枝すること、「花中花性」をともなう連続開花があることなどの 特性があらわれてきた。後は、黄色系イペーの耐寒 性の強化である。現時点でアルバ種(T. alba)が耐 寒性最強の「種」だということが判明してきた。そこで、 アルバ種の中から耐寒性が最高となる個体(実生)を 探し出して(篩い分けて)、相互交雑とその積み重ね を行ってみたところ、今春には耐寒性最強の形質が



組み込まれた「鞘」が登熟中である。秋には、大きな可能性を秘めたイペーが出現するに違いないと、秋が来るのを心待ちにしている。

(小林泰生さん:昨年度の育種功労賞受賞者)

# 栽培方法が不明なオステオスペルマムの品種開発に取り組む

群馬県前橋市の関口政行さんは、オステオスペルマムの品種開発を行ってきました。平成22年からは、 息子の雄二さんもオステオスペルマムとクレマチスの 育種を始め、親子2人で育種に取り組んでいます。

父親の政行さんは、昭和46年に18歳で就農しました。スタートは野菜栽培でしたが、3年目から花き栽培に転換しました。花きは発展途上の分野で、情報不足でしたが、高度成長期で園芸ブームの兆しが生まれていました。そこで、品種数の少ない花のバリエーションを増やそうと昭和60年頃からオステオスペルマムの育種を始めました。我が国に導入されたばかりで、栽培方法や植物の特性がよくわかりませんでしたが、早春に咲くので、春の花として定着するのではと感じて栽培を始めたのです。

でも、栽培者がほとんどいないため、本で調べたり市場で聞き取ったりしましたが、トライ&エラーの繰り返しで、栽培方法の確立に5年を費やしました。良品ができても赤紫と白しか花色がなく、バリエーションを増やそうとオステオスペルマムの交配を始めました。

オステオスペルマムは不稔の形質が強く、人工交配しても種子が実りません。そこで、多品種と密植し、風や虫に受粉を任せる自然交配を主として行ってきました。5~6年した頃から新たな花色が出現し、それを親として交配を繰り返し、花色、花形、花芯が変化した品種開発の成果が現れるようになったのです。ただ、結実率の高い個体の選抜にも努めていましたが、当時の株は採種できる種子数が少なく、思うような結果がなかなか出せませんでした。





大輪の新品種 ゆかりシンフォニー

政行さんが育成したオステオスペルマムの登録品種は、「マザーシンフォニー」(流通名「レモンシンフォニー」)を皮切りに20品種以上(現在の登録数は15)で、そのうち「レモンシンフォニー」等の4品種は、北米・EUを中心に海外で継続販売されています。

平成22年に育種に加わった息子の雄二さんは、オステオスペルマムに加えてクレマチスの育種にも挑戦しています。父親と同じ1品目に取り組むだけでは、リスクがあると感じたからです。

オステオスペルマムのこれまでの育成品種は、剪定時期・剪定回数を調整して製品をそろえているので、雄二さんは実生から株張りや株の高さ、開花時期等に差の少ないものを選び、そのうえで色や花形、大きさ等のバリエーションを追うようにしています。

クレマチスについては、うどん粉病に強い「ティンクルピンク」等の3品種を育成し、商標登録を行いました。現在は、赤、ピンク系で丈夫な品種が少ないため、それを第一の育種目標として頑張っています。

(当新聞の問合せ先 090-4059-1096 岩澤)